



1 親密ではない他者との相互作用から生じるウェルビーイングの価値

石黒 格

<立教大学現代心理学部心理学科教授>



1

背景

良好な社会関係の存在は、ウェルビーイングに強力な影響を及ぼす。肥満、飲酒などの広く知られたリスク因子と比較しても、社会関係の欠如や孤立、孤独感は、死亡率と強い関係にある（Holt-Lunstad et al., 2015; Holt-Lunstad et al., 2010）。抑鬱との関係も幅広い研究で明らかになっている（Santini et al., 2015）。

ウェルビーイングと社会関係のかかわりを対象とする研究の多くが、親密な他者との関係の有無や量、サポート授受を中心とする相対的にコストの高い相互作用がウェルビーイングを高める要因だと考えてきた。それは、個人間の関係性は、その強弱によって機能が異なるという、Granovetter（1973）以来の議論が強い影響力を有していたからである。しかし、近年になって、これまでの枠組みでは親密な他者に含まれない他者との相互作用が、ウェルビーイングに一定のインパクトをもつことが明らかになった。そのなかには、親密性の低い関係性にすら入らない、完全に知らない他者 stranger との相互作用がウェルビーイングや所属感に対して効果をもつという知見も含まれる。

都市化が進み、オンライン上でのパラソーシャルな関係が増加した現代社会では、社会的相互作用の多くが親密ではない他者との間で行われる。親密な関係を越えた人と人の相互作用を視野に入れることは、現代社会において重要な意義をもつようになってきている。本研究では、近年の研究についてまとめ、その日本社会における意義を議論する。

2

紐帯の強さと機能の古典的理解

人と人に一定の関係性が観察されるとき、その人物間には紐帯tieがあるという。人はすべての他者と等しくつき合うわけではないので、紐帯はさまざまな側面で異なっている (Brashears & Quintane, 2018; Fingerman et al., 2025; Granovetter, 1973, 1974)。社会科学領域、行動科学領域で特に重視されてきたのが紐帯の強さである。紐帯の強さは、時間、情動、親密性、相互サービス（サポート）量を加重加算したものと定義される (Granovetter, 1973, 1974)。端的に言えば、付き合いが長く、接触が頻繁で、親密で、助け合っているなら、その紐帯は強いとされる。その後の研究だけでなく、Granovetter自身の研究でも、必ずしもこの定義が厳密に用いられてきたわけではないが、直観的な理解までも含めて、強さという概念によって紐帯を区別することで、さまざまな現象が解釈可能となった。

強い紐帯は人々の社会関係において重要で、多くの機能を果たしている。強い紐帯の代表である家族や友人などの親密性の高い他者との関係は、日常生活のなかでサポート機能を果たし、幸福や健康の源泉となっている (Holt-Lunstad et al., 2010; Van Lange & Columbus, 2021)。Granovetterが指摘したのは、こうした機能には欠けていたとしても、弱い紐帯は社会ネットワークのより広い範囲から資源、特に情報を動員する経路になるということだった。強い紐帯は類似した個人の間で結ばれやすく、そのためにそれぞれが得る資源と情報もまた類似する。交換の頻度は高いが、手に入る資源は自分でも入手可能なものであることが多い。対して、弱い紐帯は異質的かつ開放的であり、日常から離れた、新しい課題を解決するために必要な情報や資源を得られる可能性が高い。Granovetter (1974) はアメリカ人の転職を例として、この理論を実証した。

この「弱い紐帯の強さ」論は、批判的なものも含めて多くの反響と研究を生み出した。それらをまとめるのは本論の目的ではない。ここで重要であるのは、批判はあるにしても、Granovetter以降、個人にとっての紐帯の機能は強さによって異なり、弱い紐帯、すなわち親密ではない他者との関係の機能は、主として資源動員であってウェルビーイングに直接つながるサポートではないという理解が定着したことである。そのため、親密ではない他者との相互作用がもつウェルビーイングに対する効果は、ほとんど研究されることがなかった。

3

親密ではない関係と主観的ウェルビーイング

2010年代の半ば以降、親密ではない関係や、我々が紐帯とは認識しない完全に未知の他者（strangers。日本語での用語が存在しないので、ここではストレンジャーと呼ぶ）との相互作用に、主観的ウェルビーイングに対するインパクトがあることが明らかになった。その嚆矢となる研究を、異なる研究者が、それぞれ2014年に発表している（Epley & Schroeder, 2014; Sandstrom & Dunn, 2014）。

Sandstrom and Dunn (2014) は、コーヒーのチェーン店に入る客を無作為に二群に分け、それぞれに注文時に、①できるだけ効率的に注文を済ませるようにする（統制群）か、②率直な会話¹をする（実験群）かのどちらかを依頼した。退店後に質問紙への回答を求めたところ、実験群はポジティブ感情が高かった。Epley and Schroeder (2014) もまた、類似した実験で同様の結果を得た。公共交通機関を利用する客を三群に分け、それぞれに乗車中に、①いつもどおりにする（統制群）、②一人を楽しむ（孤立群）、③近くの乗客と長めの会話をする（会話群）という依頼をした。すると、会話群は孤立群よりも乗車体験をポジティブに感じていた。統制群は、両者の中間に位置していた。

いずれの研究でも、参加者と会話相手との関係は明確ではない。参加者がコーヒー店の常連だった、顔見知りの乗客を選んで話しかけたといった可能性は否定できない。だが、そうした他者の多くが古典的な意味で回答者と親密な関係にあったとは考えにくい。したがって、これらの先駆的な実験は、親密ではない他者との一過性の相互作用であったとしても、主観的ウェルビーイングに対するインパクトがあることを示している。親密ではない他者（時に関係性の存在しないストレンジャー）との、短い、内容も薄い相互作用を、Sandstrom and Dunn (2014a) は最小相互作用minimal social interactionと呼ぶ。

これら初期の実験では、相互作用の中身も統制されておらず、「最小」という語で想定されるものだったのかは曖昧である。しかし、スクール・バスの運転手に降車時に礼を述べるように依頼しただけで、大学生の主観的ウェルビーイングが高まったとする報告（Gunaydin et al., 2021）もなされ、最小と呼び得る相互作用がウェルビーイングに寄与することが明らかになっている（Ascigil et al., 2023）。

これらの結果は、直観的には腑に落ちるところがあるものの、あいさつをする程度の相互作用が心理的なインパクトをもつ理由やプロセスを解釈するのは難しい。特に、

弱い紐帯の機能として考えられてきた資源動員という枠組みでの理解は困難である。サポートの交換という視点でも、最小相互作用が心理的効果を生むことは理解しにくい。

現在のところ、最少相互作用の心理的インパクトが生じるプロセスで中心的な役割を果たしていると考えられているのは、所属感sense of belongingである（Hirsch & Clark, 2019; Sandstrom & Dunn, 2014）。人は社会的動物であり、属する社会や集団から排除されれば大きな不利益を受ける。そのため、人には先天的に所属欲求need to belong / need for belonging, すなわち集団に所属し、受け入れられたいという欲求があると考えられている（Baumeister & Leary, 1995）。この欲求が満たされた状態であろうとするため、人は他者からの排除exclusionの手がかりに敏感であり、わずかな排除の手がかりでも所属感が減少し、そのことがウェルビーイングを低下させる。

逆に、人は包摂inclusionのわずかな手がかりにもポジティブに反応する。したがって、正負の両面で所属感が媒介するかたちで最小相互作用とウェルビーイングの正相関が生じる（Sandstrom & Dunn, 2014）。この媒介過程は日本人サンプルを対象とした調査研究でも再現されている（Ishiguro, 2023）。

4

弱い紐帯概念を使用することの問題

最小相互作用にかかわる研究では、親密ではない他者との関係性が弱い紐帯という語で表現されてきた。しかし、弱い紐帯で表現される関係は多様で、語としては曖昧である。Brashears and Quintane（2018）の紐帯の強さ概念の整理、拡張をみれば、そのことがわかる（図1）。この類型では冗長性、帯域（bandwidth, 情報・資源の伝達能力）、接触頻度という独立した三次元で紐帯が整理されており、Granovetter（1973）の定義する古典的な弱い紐帯は、8つのタイプのひとつでしかない。だが、「弱い紐帯」という語が用いられるとき、図中の同僚・隣人、ブリッジ、バーテンダー、休眠紐帯dormant ties²が区別されずに含まれることが多い。Sandstrom & Dunn（2014）では実験参加者とバリスタ（コーヒー店のスタッフ）の関係を弱い紐帯と呼んでいるが、Brashears and Quintaneの整理から考えれば、それは性質の異なるさまざまな関係性を区別することなく、まとめてしまっていることになる³。

こうした混乱だけでなく、ここまでに議論した親密ではない関係の効用を考えると、紐帯という考え方自体、その視野が限られているという問題がある。紐帯という

図1 「弱い紐帯」に含まれる多様な関係性

		冗長性が高い		冗長性が低い	
		接触頻度		接触頻度	
		高い	低い	高い	低い
伝達能力	高い	強い紐帯 ^{a)} 広帯域紐帯 ^{b)}	牧師 ラビ イマーム	ブリッジ ^{c)}	休眠紐帯 ^{d)}
	低い	同僚 隣人	バリスタ	バーテンダー	弱い紐帯 ^{a)} 狭帯域紐帯 ^{b)}

a) Granovetter (1973)

b) Arai & Van Alstyne (2011)

c) Burt (1992)

d) Levin et al. (2011)

Brashears & Quintane (2018)から作成

語は互いを個人として認識し、相互作用が継続する関係性という含意をもってしまう。そのため、Brashears and Quintane (2018) の類型でもストレンジャーは包含されていない。紐帯という概念に依存することで、ストレンジャーとの相互作用までを視野に入れた最小相互作用研究の意義を矮小化してしまう危険がある。

そこで、本研究では親密ではない他者との相互作用とその機能を理解するのに資する2つの類型を紹介する。

第一の類型は、接触の繰り返しと個人の情緒的な投資（コミットメント）を重視する。

第二の類型は、接触の繰り返しと接触を担保する場と活動の共有を重視する。次節で第一の類型を、続く節で第二の類型を紹介する。

5

接触の繰り返しと情緒的コミットメントに基づく類型

第一の類型は、最小相互作用研究の流れのなかで提言されたFingerman et al. (2025) の類型である⁴。この類型は、親密ではない関係を学術的に整理する初の試みであり、丁寧に説明するだけの価値がある。

表1は、Fingerman et al. (2025) が提示した類型を筆者が日本語訳したものであ

表1 Fingerman et al. (2025) によるストレンジャーからフリンジシップまでの類型
日本語訳は筆者による。

	ストレンジャー	有意味な ストレンジャー	見知った人	フリンジシップ
接触頻度	一回きり	繰り返される が、散発的で予 測できない	日常生活の中で 頻繁でありうる	規則的かつ定期的
認識と関係形成・維持 への意思	なし	認識	受容	お互いを選択し て付き合い、紐 帯の価値も互い に認識している
コミュニケーション	インパクトはあ るが一回きり	短い感謝の言葉 など	雑談や、有用な 情報を含む会話	互いの関心事に ついての話し合 い、質の高いコ ミュニケーショ ン
情緒的投資	なし	なし	最小	愛着、次の機会 を楽しみにする
事例	電車で有益なア ドバイスをくれ た知らない乗客	毎日同じバスに 乗っている人、 地域担当の配達 員	同じ組織のメン バー	授業を楽しいも のにしてくれる クラスメート

Fingerman et al. (2025)より作成

る⁵。完全なストレンジャーから、「知人以上友人未満」の関係としてFingermanらが新たに提唱するフリンジシップfringeshipsまでの4つのタイプがこの類型には含まれている⁶。

第一のタイプであるストレンジャー⁷は、都市的な公共空間で我々が日々出会う、初対面で、一回性の強い相互作用の後に無関係に戻る他者を指している。互いを個人として認識することはない。最小相互作用でみたようにストレンジャーとの相互作用にも一定のインパクトはあるが、それも一回性のものである。関係継続の鍵となる情緒的な投資はまったくない。

第二のタイプである有意味なストレンジャーconsequential strangersは、繰り返しの接触があるストレンジャーである。繰り返しの接触があるため、相手を個人として識別することが可能になる。接触の繰り返しのなかで相互作用が生じる可能性があるが、その頻度は少なく、予測可能性も低い。何らかの相互作用が起きたとしても最小のものに留まるし、情緒的な投資も行われなない。本数の多い路線バスを利用している人々が例となるだろう。このような状況では接触は繰り返され得るが、常に同じ便に乗るわけではないため、接触のタイミングの予測は難しくなる。このタイプの特徴は、Milgram (1992) のfamiliar strangersとほぼ一致する。

第三のタイプは見知った人familiarで、より接触頻度が高く、互いを個人として認識している関係性である。同僚が例となる。接触の機会があることは予測しやすく、より多くの相互作用が行われ、それが時として有用なサポートをもたらすこともある。特に情報の提供などは一般的であり得る。だが、見知った人との関係は義務的なものであることが多く、情緒的な投資は最小限に留まる。

第四のタイプはフリンジシップfringeshipsである。これはFingerman et al. (2025)の造語で、個人の社会関係を親密で重要な関係をコア、より親密性や重要性が低い周縁fringeと分けたときに、周縁にありながら、しかし個人にとって特別なつながりspecial connectionとして認識される他者との関係を指している。ここでの特別なつながりとは、ある社会的文脈に複数の他者がいるなかで、相互作用するパートナーとして安定して選択されていることを指す。ヨガ・スクールの教室のなかで、毎回並んで出席し、ある程度の会話もする他者が例とされている。

フリンジシップは社会的文脈（場や活動など、何らかの状況）の共有に依存している。その点で、脱文脈化された関係である友人関係とは異なる。社会的文脈から離脱すれば、その関係は消失する。Fingermanらの論文のタイトルに書かれるように、「知り合い以上友人未満」の関係がフリンジシップである⁸。フリンジシップは社会的文脈の共有によって接触の機会が担保されているため、関係の継続に時間などの資源の投資やコミットメントの必要が小さい点が、友人などの親密な関係とは異なる。また、フリンジシップとの相互作用は関係性の維持ではなく、その状況での活動を目的としているため、関係性や相互作用のネガティブな側面は強く抑制される。したがって、フリンジシップ間では友好的な相互作用が行われやすく、幸福感の上昇などのポジティブな効果がストレンジャーや見知った人より強いことはもちろん、ときに親密な関係性よりも強いとされる。

6

社会的文脈の共有に注目した類型

親密ではない関係を理解するもうひとつの枠組みとして本研究で紹介するのは、社会関係の形成、維持に果たす社会的文脈と、その共有に注目する視点である。社会的文脈の共有なしには社会的相互作用は始まらない。複数の個人が何らかのかたちで居合わせることで、初めて相互作用が起き得るからである。特に、接触及び相互作用の繰り返し可能性は、社会的文脈に強く依存する。

社会的文脈に注目するアプローチでは、個人間の関係の有無や、それぞれの関係の

強弱ではなく、社会的文脈のなかでの相互作用の機会と中身に注目する。都市公共空間には多数の、互いにストレンジャーである個人が行き交っているが、そうした人々の間で生じる社会的相互作用については、Goffman (1963) をはじめとする研究の伝統がある。その系譜に連なる概念として、anchored personal relationships (Lofland, 1989; Morrill & Snow, 2005) がある（訳語がない⁹ためAPRと略記する）。

原典におけるAPRの定義は難解であるが、その中心的なエッセンスは、社会的文脈のなかで形成・維持され、その文脈の内部では友好的で反復的な相互作用があるし、内部にいる人々はそうした相互作用を期待できるが、脱文脈はされない関係性である。APRはバーに集まる常連客同士の関係を例として説明される。バーの常連はそれぞれが定期的に来店し、その場では友好的な相互作用を交わす。来店するときに、互いがその場にいることと友好的な相互作用を期待もする。しかし、バー以外の場で、何か別の活動を（特に1対1で）行うことはほとんどない。都市的公共空間であっても、社会的文脈が共有されることで、その文脈内部では相互作用が繰り返されることになる。文脈の共有がない場合、座席を譲るなどの一時的な相互作用は生じて、接触が繰り返されることはまれで、相手を個人として認識することもほとんどない。Loflandは社会的文脈に根ざさない一過性の関係はfleeting personal relationshipsと呼んで、APRと区別する。

APRは社会的文脈の共有を重視する点でフリンジシップと類似する。その社会的文脈から離脱すれば関係自体も終了することや、社会的文脈への参加自体が目的であるときは、関係維持のコストが低いといった特徴も類似している。異なるのは、フリンジシップは個人の選択とコミットメント（特別なつながり）を重要な要因と考えるのに対して、APRは社会的文脈のなかでの、集合的な関係性を視野に入れる点である。Loflandの視点からは、個人間の関係の強さではなく、社会的文脈への参加頻度やコミットメントの強さで、親密ではない他者との相互作用を考える視点が得られる。

社会的文脈として重要なのは、Loflandらが強調している物理的な場に加えて、活動だと考えられる（古谷野, 2024）。オンラインでの活動も含めて、流動性の高い現代社会では、活動と物理的な場は必ずしも結びついておらず、理論的にはこれらを独立で考えることができる。古谷野（2024）は、都市で独居する高齢者が会話する非親族に、親密性ではなく場や活動の共有を基盤とする他者が多く含まれることを示した。会話する非親族としてあげられたのは、「近所の人」が最も多く（30.1%）、第二位は「医師・看護師・ヘルパー」といった医療・介護関係者の21.4%だった。居住地という場¹⁰を共有する隣人や、医療や商行為などの活動を通じたかかわりが大きな役割を果たし

ているのである。脱文脈的な「友だち」は16.0%を占めるが、この値は商活動に基づく「店員や訪問販売の人」の14.1%と大きな差はない。高齢者に限らず、「ママ友」「犬友」「推し友」といった、特定の場所、特定の活動の共有による関係性を指し示す言葉が人口に膾炙していることも、現代の日本社会に活動の共有を基盤として維持されている関係が広く存在していることを示唆している。

社会的文脈に依存した関係を幅広く、一般的なサンプルを対象として検討した量的な研究はほとんど存在しないが、筆者は個人間の紐帯や情緒的コミットメントに注目するアプローチよりも、社会的文脈の共有に基づく集合的な相互作用に注目するアプローチのほうが、日本社会における社会的相互作用の促進には有用だと考えている。次に述べるように、日本人はストレンジャーや見知った人に自ら個人としてかかわろうとする傾向が低いと考えられるからである。

7

日本社会とストレンジャー

親密ではない関係やAPRの有益性を論じつつ、ここまで指摘しなかった重要な問題がある。それは、最小相互作用研究の大半が欧米社会で行われており、日本人や日本社会をターゲットにしていないことである。さまざまな領域から得られる実証的知見からは、日本社会にはストレンジャーや親密ではない他者との相互作用が抑制される社会文化的な要因が存在していると考えられる（まとめとして石田（2011）や田中（2021）など）。

日本人がストレンジャーとの相互作用を（意図的であれ、非意図的であれ）避ける傾向にあることを示唆する統計として著名なもののひとつとして、Charity Aid Foundationが年次で公開しているWorld Giving Index（WGI）における日本の順位の低さがある。WGIは過去1か月の間の人助けの経験を、「ストレンジャーを助けた」「金銭を寄付した」「ボランティアに時間を割いた」の3つの基準で測定する国際比較調査である。日本人の調査回答者のうち「ストレンジャーを助けた」経験がある者の比率は過去10年にわたって20%台半ばで推移している。2023年は21%、2024年は24%である（Charities Aid Foundation, 2023, 2024）。WGIの対象国には変動があるため、単純比較はできないが、この数値は一貫して最下位に近い。絶対値としても低く、援助の経験率は最大の国では80%を超え、下位10位の国ですら40%を超えている。寄付やボランティアの数値は、高いとはいえないまでも、ここまで極端に低いわけではない（2024年のボランティアは96位、寄付は118位で、142か国のなかでは下位だが）。

社会的な援助のなかでも、ストレンジャーとの相互作用が特異的に避けられるのである。

日本人は、知人との相互作用に対してすら回避的である。NHK放送文化研究所(n.d.)による日本人の意識調査では親戚、職場、近隣のそれぞれについて、望ましいつきあい方を尋ねている。選択肢は「一応の礼儀を尽くす程度のつきあい(形式的つきあい)」「気軽に行き来できるようなつきあい(部分的つきあい)」「何かにつけ相談したり、たすけ合えるようなつきあい(全面的つきあい)」だが、一貫して形式的つきあいを望ましいとする回答者が増加している。

親密な関係ですら、低調なのかもしれない。Parady et al. (2021) は親密な他者からなるコア・ネットワークのサイズが日本では小さいことを示し、時系列的にも縮小傾向であることも指摘している。先述の日本人の意識調査でも、2008年から10年間で友人関係について形式的つきあいを望ましいとする回答者が13%から19%へと増えている。逆に、同期間に全面的つきあいが望ましいとする回答者は41%から34%に減っている。

日本人が社会関係について回避的であるのならば、親密ではない他者との相互作用の機会は制限されざるを得ない。ストレンジャーや知人にはたらしかけても、相手が回避的に振る舞えば相互作用は成立しない。事実、Epley and Schroeder (2014) の、ストレンジャーに話しかけるという実験パラダイムに基づいて日本で行われた追試実験では、実験操作の効果が有意にはならなかった(針原, 2019)。興味深いのは、相互作用のはたらしかけが無視されるなどして成立しなかったケースと、成立したケースとを分けて分析すると、相互作用が成立したケースでは先行研究の結果が再現されたことである。このことは、ストレンジャーに話しかけたとき、相手から受け入れられ、相互作用が成立する確率が日本では欧米よりも低く、平均的には効果が生じないレベルであることを示唆している。

8

なぜ日本人はストレンジャーとの相互作用を回避するか

ストレンジャーとの相互作用に関する研究は開始されて日が浅いうえ、研究の中心が欧米であるため、日本人がなぜ回避的であるのかはわかっていない。ただ、日本人の他者に対する態度や社会的意思決定に関する研究から示唆的な知見は得られている。

第一に、日本人は情報のない他者との協力的相互作用を回避する傾向がある。山岸(1998)は、相互作用パートナー間の関係を信頼関係と安心関係に分けた。信頼関係

は、社会的な不確実性のある状況、すなわちパートナーの行動意図が協力的、親和的なのか、搾取的、敵対的なのか分からない状況で、それでもなおパートナーの意図を信頼することで形成される協力関係である。このように情報がなくても協力的な意図を仮定する傾向を、山岸は一般的信頼と呼んでいる。これに対して、安心関係とは制度的な罰や強制、報復の可能性などによって、合理的であるならば非協力的な行動はとり得ないと判断できる状況でのパートナーとの協力関係である。パートナーから搾取される危険は、パートナーの意図や善良さとは異なるレベルで担保されており、この状況では人はパートナーを信頼する（さらには信頼性を判断する）必要がない。一連の実験や質問紙調査による日米比較で山岸と共同研究者が明らかにしたのは、日本人が北米人と比較して一般的信頼が低いことだった。一般的信頼の低さは行動にも反映されており、日本人は安心関係のなかでは協力的に振る舞っても、情報のない他者と新たに協力的な関係を築くのには消極的だった。

都市公共空間で出会うストレンジャーの内面について、我々は情報をもたない。そのため、相互作用をはたらきかけたときの結果には大きな社会的な不確実性がある。もちろん、欧米においても、社会的な不確実性は人々がストレンジャーとの相互作用を回避しようとする理由のひとつとされている（Atir et al., 2023; Sandstrom & Boothby, 2021; Sandstrom et al., 2022）。だが、日本においては、その影響がより強い可能性が高い。

第二に、日本では行為の評価が社会的に決定される側面がある。最小相互作用の研究で検討されているのは、会話のほか、あいさつをする、礼をいうなどの、社会的には望ましいと考えてよい行為である（Ascigil et al., 2023）。この望ましさが普遍的なら、それらの行為を躊躇する必要はない。拒否されたとしたら、拒否した相手が無礼なのであって、自分と、自分の行為の評価は下がらない。しかし、新谷ら（Niya et al., 2022）は、日本人は、第三者的な視点では望ましい行為であったとしても、被援助者が明確に援助を要請していない場合には、援助を差し控える傾向があることを示している。北米人ではこのような傾向はみられず、明確な援助要請の有無にかかわらず、第三者的に望ましい援助的な行動が遂行された。

この実験は、他者にはたらきかける行為の評価について、日本社会では社会的な不確実性が大きいことを示唆している。一般的には望ましい行為も、受け手が（たまたま）評価してくれなければ、望ましくない行為となってしまうからである。この解釈は、WGIにおいてストレンジャーを助けるという指標では最下位に近い日本が、ボランティアと寄付についてはまだしも高い順位を占めていることも説明するかもしれな

い。それらの行為は制度によって望ましが保証されやすいのだと考えられる¹¹。

第三に、倫理的な判断が分かれ得る行動について、日本では行為することよりも行為しないことが選好される（山本・結城, 2019）。日本のように社会関係の組み替えが難しい（関係流動性が低い）社会では、既存の関係から排除されたときに新しい関係でそれを代替することができない。そうした社会環境では良い評判を得ることよりも、悪い評判を避けることが重要だとされる（Hashimoto & Yamagishi, 2015）。行為するという選択は、行為しないという選択と比較して良悪どちらの評判とも結びつきやすい。行為した理由は行為者の意図と結びつきやすく、したがって評判を生み出しやすいのに対して、行為しなかった理由は曖昧で、意図に帰属することが難しいからである（状況に気づかなかつたなど、偶然の要因であり得る）。関係流動性の低い社会環境で生きる日本人は、悪い評判を得ることを避けるために、評価の分かれ得る意思決定場面では行為しないことを選ぶのだとされる。

評価の分かれ得る選択について、日本人が行為しないことを選ぶのであれば、ストレンジャーとの相互作用は抑制される。ストレンジャーに対するはたらきかけは、第二の論点で述べた相互作用パートナーからの評価だけでなく、第三者まで含めた社会的な評価につながり得る行為であり、かつ、日本では望ましい行動でも評価が分かれ得るからである。

これらの論点は独立ではなく、互いに関連している。筆者は親密ではない他者との相互作用を抑制する要因として重要なのは、日本においても欧米同様に社会的不確実性だと考えている。上記の要因は、親密ではない、場合によっては親密な他者との相互作用であっても、より強い社会的不確実性を感じざるを得ない社会、文化的な状況に日本人が置かれていることを示唆している。

9

親密ではない他者との相互作用を増やすために

日本人がストレンジャーとの相互作用を避けようとする傾向はあくまでも相対的なもので、欧米を中心に行われた研究や社会実装の取り組みでも、ストレンジャーとの相互作用に対する忌避感があることが報告されている（Keohane, 2021）。ストレンジャーから援助を受けられる可能性は、現実以上に低く見積もられることも知られている（Flynn & Lake, 2008）。

欧米ではストレンジャーとの相互作用を増加させるための介入的な取り組みの効果が検討されている。例えば、自らの社会的スキルと、他者の自分への評価と関心は過

小推測されるが、これらに由来する不安をストレンジャーに話しかける練習をすることで解消しようとする実験的介入が効果を上げたとの報告がある（Sandstrom et al., 2022）。だが、上述した日本人の特性を考えたとき、個人のスキルや心理特性を変化させようとする試みは困難が大きいと考えられる。介入を受けた個人がストレンジャーに対する行動を変化させても、受け手となった相手が、それを奇異に感じたり、拒否したりする可能性が高いからである。針原（2019）の知見は、このことを明確に示している。

安心関係を選好する者が多い日本社会では、社会的不確実性の低い環境を生み出すという、より環境志向のアプローチのほうが有望である。ストレンジャーではなく、有意義なストレンジャーや見知った人との相互作用を増やすことを目指し、ストレンジャーとの接触、特に繰り返しの接触のアンカーとなる場や活動をつくり出していくのである¹²。

すでに紹介したように、首都圏在住の独居高齢者という、孤立リスクの高い人々の社会的相互作用には、職業的活動に由来する相互作用の果たす役割が大きい（古谷野, 2024）。職業的活動として接する他者との相互作用は目的志向で予測可能性が高いから、社会的不確実性は生じにくい。さらに特定個人間で相互作用が繰り返されるのであれば、互いの情報が蓄積され、社会的不確実性はより低減される。こうした職種の労働条件を改善して職員の定着率を高める、個々の職員の担当を固定するといった対応をとることで、社会的不確実性を低減できるだろう¹³。

医療においては「かかりつけ」の重要性が指摘されているが、小売店、飲食店も繰り返し利用することで、ストレンジャーだった店主と店員が見知った人になり得る。店員の入れ替わりを少なくすることができれば、あるいは入れ替わりがほとんどない小規模自営の店を「ひいき」にすれば、単なる買い物や飲食が、（少なくとも最小の）相互作用の機会となるだろう。Cowen（1982）は職業に基づく関係性におけるサポートの受領について検討し、理容師に対しては悩みを打ち明ける人が多く、かつサポート的な反応を受け取る傾向が強いことを示している。特定の客と理容師との関係性が継続すること、理髪という活動の継続時間が長く、かつ動くことができないので会話をするほかないことが理由であろう。時間的、精神的なゆとりがない状態では、最小の相互作用すら難しいのは、職業的な場面でなくとも同じである。人々が一定の時間、自由かつ快適に滞在できる公共空間のデザインが必要である。公園を整備する、公共空間に座りやすいベンチを設置するなどが、そのための施策となるだろう。

活動という観点からは、離脱しやすい娯楽的な結びつきが有望である。日本人の友

人関係は、具体的な資源交換やサポートの機能よりも、娯楽的な機能を中心に形成されるように変化している（石黒, 2018）。この変化の良否についての評価は分かれるだろうが、事実として娯楽的な関係性が好まれるのであれば、娯楽を通じた社会的相互作用を増加させるのは、援助的な関係を増加させるよりも容易な可能性が高い。参加の自由や離脱可能性の高さという親密ではない関係性の有用性を活かすのであれば、一般的な娯楽¹⁴に関する小規模なイベントの開催を推進するのがひとつの手段となろう。イベントが行われる場の数は多いほうが、参加する場を自由に選択し、問題があれば離脱することが容易なので望ましい。ただし、イベントを成立させるためには一定の参加者数が必要であるから、都市度の低い地域では困難が大きい。またイベントへの参加は資源の少ない者や高齢者には難しいこともある。

公園などの存在を前提とすれば、やはりコストはかかるが犬の飼育により、ストレンジャーとの相互作用の可能性を高め、有意味なストレンジャーや見知った人を増やすことができる可能性がある（Dunn & Lok, 2022）。犬は定期的な散歩を要するため、飼い主が外出する理由となる。しかも、犬が存在する場では親密ではない人々の間での相互作用が生じやすい（McNicholas & Collis, 2000）。これらの偶発的な相互作用から、友人関係が形成されることも米豪での事例（Wood et al., 2017; Wood et al., 2015）では示されている。日本においては犬の飼育は必ずしも友人数の増加につながるわけではない（金見, 2006）が、特定の場所で繰り返し顔を合わせる相手（すなわちAPR）や、ストレンジャーとの相互作用は飼育者のほうが多い（Ishiguro et al., 2025）。犬を介した相互作用や関係性は、犬への関心に限定される傾向がある（Robins et al., 1991）が、だからこそ社会的不確実性が低くなりやすいと考えられる。

犬の飼育と相互作用の関係は、飼育者の居住地に安全に散歩ができ、一定時間は犬とともに滞在できる場がなければ弱くなるであろう。日本では公共交通機関や飲食店を利用できないなど、犬を連れた外出に制限が多い。法的には認められた盲導犬や介助犬の同伴が断られることすらまれではない（全国盲導犬施設連合会, 2025）。集合住宅や賃貸住宅では、犬に限らずペットの飼育全体が認められていないことも多い。騒音、糞尿、攻撃、人畜共通感染症など、社会的コストがあるとはいえ、社会的相互作用を促進する効果を考えるのであれば、公共空間への犬のアクセス可能性を高めることには意義があるだろう。

残念なことに、日本社会では公共空間で知らない誰かと話すことは一般的な営為ではない。世界的にみても、スマートフォンの普及は、公共空間で親密ではない他者と相互作用する機会と必要性を失わせた。人々は公共空間で単独で行動しながら、親密な他者やパラソーシャルな他者と相互作用している (Kushlev et al., 2019)。かつては道に迷えば、たまたまその場にいた誰かに案内を頼むこともあり得たが、今はスマートフォンの地図を確認し、ナビゲートしてもらえば事足りてしまう (Kushlev et al., 2017)。

現代社会における技術の進歩や社会の変化が、全体として人々の相互作用の機会を減らす方向に進んでいる。客にとっての店の従業員は、雇用が安定していればAPRとなりうるが、雇用の非正規化によって従業員の流動性が高まれば、ストレンジャーとなってしまう。「ギグ・ワーカー」が担うデリバリー・サービスはその極北であろう。セルフレジの普及は、対人的な相互作用の機会すら失わせる。自動運転が普及すれば自家用車で移動する人が増えるだろうが、それは公共交通機関で生じていた偶発的な相互作用の機会を失わせる。

日本社会では、公共空間に人々が滞留すること自体に制約がかかる傾向がある。五十嵐 (五十嵐, 2004, 2005, 2022) は公園や広場など、本来ならば人々が自由に使えるはずの公共空間が禁止事項にあふれていることを指摘している。しかも、ベンチなどの形状を「工夫」することにより、長時間の滞在を困難にしているという。ここで排除の対象として想定されているのはホームレスや若者などの社会的弱者であるが、そうした人々が滞在しにくい場所は誰にとっても滞在しにくいのであり、地域の住民が集い、互いに見知った他者となっていく社会的文脈としての機能を公共空間から失わせる。治安対策と称して、ことさらに「不審者」をターゲットとする施策も、一般の信頼が低い日本社会では、ストレンジャーとの相互作用を失わせる。

ストレンジャーや、親密性の低い知人との相互作用には不確実性があり、個々人にとっては面倒で、不要なものと感じられやすい。しかし、ストレンジャーとの相互作用に対して回避的だと考えられる日本社会にあってなお、相互作用が成立したときには心理的にポジティブな帰結がもたらされる (針原, 2019) し、APRの存在はコミュニティへの所属感を高める (Ishiguro et al., 2025) など、社会的有益性がある。公共空間でのストレンジャーや見知った他者との相互作用にポジティブな価値があること

を社会的に共有する努力が必要である。同時に、そうした相互作用に内在するリスクが顕在化しないよう制度や施設、街区を設計していく必要があるだろう。例えば、子どもが成人と遮蔽された空間で相互作用するのは、子どもにとって安全ではない。この問題の解消は犯罪学や都市計画の領域となり、筆者の専門を離れるが、都市公共空間における人々の日常的な相互作用が、半世紀以上前から都市計画における重要な目的だったことは指摘できるであろう。Jacobs (1961) が指摘しているように、多くの人々が安定して滞留している場こそ、多くの目が光り、より安全なのである。

【引用文献】

- Aral, S., & Van Alstyne, M. (2011). The diversity-bandwidth trade-off. *American Journal of Sociology*, 117(1), 90–171. <https://doi.org/10.1086/661238>
- Ascgil, E., Gunaydin, G., Selcuk, E., Sandstrom, G. M., & Aydin, E. (2023). Minimal social interactions and life satisfaction: The role of greeting, thanking, and conversing. *Social Psychological and Personality Science*, 16(2), 202–213. <https://doi.org/10.1177/19485506231209793>
- Atir, S., Zhao, X., & Echelbarger, M. (2023). Talking to strangers: Intention, competence, and opportunity. *Current Opinion in Psychology*, 51, 101588. <https://doi.org/10.1016/j.copsyc.2023.101588>
- Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117(3), 497–529. <https://doi.org/10.1037/0033-2909.117.3.497>
- Brashears, M. E., & Quintane, E. (2018). The weakness of tie strength. *Social Networks*, 55, 104–115. <https://doi.org/10.1016/j.socnet.2018.05.010>
- Charities Aid Foundation. (2023). *CAF World Giving Index 2023: Global trends in generosity*. https://www.cafonline.org/docs/default-source/about-us-research/wgi_report_2023_final.pdf?sfvrsn=402a5447_2
- Charities Aid Foundation. (2024). *CAF World Giving Index 2024: Global trends in generosity*. https://www.cafonline.org/docs/default-source/inside-giving/wgi/wgi_2024_report.pdf
- Dunn, E. W., & Lok, I. (2022). Can sociability be increased? In J. P. Forgas, W. Crano, & K. Fiedler (Eds.), *The psychology of sociability* (pp. 98–115). Routledge.
- Epley, N., & Schroeder, J. (2014). Mistakenly seeking solitude. *Journal of Experimental Psychology: General*, 143(5), 1980–1999. <https://doi.org/10.1037/a0037323>
- Fingerman, K. L., Birditt, K. S., Fiori, K. L., Hall, J., Huxhold, O., Rauer, A., Sandstrom, G. M., & Sprecher, S. (2025). More than an acquaintance less than a friend: Fringeships in everyday life. *Review of General Psychology*, 29(3), 356–372. <https://doi.org/10.1177/10892680251357549>
- Flynn, F. J., & Lake, V. K. B. (2008). If you need help, just ask: Underestimating compliance with

- direct requests for help. *Journal of Personality and Social Psychology*, 95(1), 128–143.
<https://doi.org/10.1037/0022-3514.95.1.128>
- Goffman, E. (1963). *Behavior in public places*. The Free Press of Glencoe.
- Granovetter, M. S. (1973). The strength of weak ties. *American Journal of Sociology*, 78(6), 1360–1380. <https://doi.org/10.1086/225469>
- Granovetter, M. S. (1974). *Getting a job : A study of contacts and careers*. Harvard University Press.
- Gunaydin, G., Oztekin, H., Karabulut, D. H., & Salman-Engin, S. (2021). Minimal social interactions with strangers predict greater subjective well-being. *Journal of Happiness Studies*, 22(4), 1839–1853. <https://doi.org/10.1007/s10902-020-00298-6>
- 針原 素子 (2019). 見知らぬ他者との相互作用が及ぼす心理的影響——通学時の経験を用いたフィールド実験—— 東京女子大学比較文化研究所紀要, 80, 1–13.
- Hashimoto, H., & Yamagishi, T. (2015). Preference - expectation reversal in the ratings of independent and interdependent individuals: A USA-Japan comparison. *Asian Journal of Social Psychology*, 18(2), 115–123. <https://doi.org/10.1111/ajsp.12094>
- Hirsch, J. L., & Clark, M. S. (2019). Multiple paths to belonging that we should study together. *Psychological Science*, 14(2), 238–255. <https://doi.org/10.1177/1745691618803629>
- Holt-Lunstad, J., Smith, T. B., Baker, M., Harris, T., & Stephenson, D. (2015). Loneliness and social isolation as risk factors for mortality : A meta-analytic review. *Perspectives on Psychological Science*, 10(2), 227–237. <https://doi.org/10.1177/1745691614568352>
- Holt-Lunstad, J., Smith, T. B., & Layton, J. B. (2010). Social relationships and mortality risk : a meta-analytic review. *PLoS medicine*, 7(7), e1000316. <https://doi.org/10.1371/journal.pmed.1000316>
- 五十嵐 太郎 (2004). 過防備都市 中央公論新社
- 五十嵐 太郎 (2005). 過防備都市の是非を問う 都市住宅学, 2005 (48), 14–18. https://doi.org/10.11531/uhs1993.2005.48_14
- 五十嵐 太郎 (2022). 誰のための排除アート?——不寛容と自己責任論—— 岩波書店
- 石田 光規 (2011). 孤立の社会学——無縁社会の処方箋—— 勁草書房
- 石黒 格 (2018). 親密な友人関係の変化 石黒 格 (編) 変わりゆく日本人のネットワーク——ICT普及期における社会関係の変化—— (pp. 73–97) 勁草書房
- Ishiguro, I. (2023). Minimal social interactions and subjective well-being in the Japanese context : Examination of mediation processes using a national representative sample. *Social Sciences & Humanities Open*, 8(1), 100713. <https://doi.org/10.1016/j.ssaho.2023.100713>
- Ishiguro, I., Kodama, S., Koyasu, H., Nagasawa, M., & Kikusui, T. (2025). Dog ownership enhances anchored personal relationships and sense of community : A comparison with incidental interactions and friendships. *Plos One*, 20(12), e0336957. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0336957>

pone.0336957

- Jacobs, J. (1961). *The death and life of great American cities*. Random House.
- 金児 恵 (2006). コンパニオン・アニマルが飼主の主観的幸福感と社会的ネットワークに与える影響
心理学研究, 77(1), 1-9. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.77.1>
- Keohane, J. (2021). *The power of strangers: The benefits of connecting in a suspicious world*. Random House.
- 古谷野 亘 (2024). 孤独・孤立と高齢期の社会関係 生きがい研究, 30, 19-32.
- Kushlev, K., Hunter, J. F., Proulx, J., Pressman, S. D., & Dunn, E. (2019). Smartphones reduce smiles between strangers. *Computers in Human Behavior*, 91, 12-16. <https://doi.org/https://doi.org/10.1016/j.chb.2018.09.023>
- Kushlev, K., Proulx, J. D. E., & Dunn, E. W. (2017). Digitally connected, socially disconnected: The effects of relying on technology rather than other people. *Computers in Human Behavior*, 76, 68-74. <https://doi.org/https://doi.org/10.1016/j.chb.2017.07.001>
- Levin, D. Z., Walter, J., & Murnighan, J. K. (2011). Dormant ties: The value of reconnecting. *Organization Science*, 22(4), 923-939. <https://doi.org/10.1287/orsc.1100.0576>
- Lofland, L. H. (1989). Social life in the public realm: A review. *Journal of Contemporary Ethnography*, 17(4), 453-482. <https://doi.org/10.1177/089124189017004004>
- McNicholas, J., & Collis, G. M. (2000). Dogs as catalysts for social interactions: Robustness of the effect. *British Journal of Psychology*, 91(1), 61-70. <https://doi.org/https://doi.org/10.1348/000712600161673>
- Milgram, S. (1992). *The individual in a social world: Essays and experiments, 2nd ed.* McGraw-Hill Book Company.
- 三菱総合研究所 (2021). 介護現場におけるハラスメントへの対応に関する調査研究事業報告書 厚生労働省
- Morrill, C., & Snow, D. (2005). The study of personal relationships in public places. In C. Morrill, D. Snow, & C. White (Eds.), *Together alone: Personal relationships in public spaces* (pp. 1-22). University of California Press. <https://doi.org/10.2307/j.ctv11hpstn.5>
- NHK放送文化研究所 (n.d.). 日本人の意識1973-2018 <https://www.nhk.or.jp/bunken/yoron-isiki/nihonzin/> (2025年12月3日アクセス)
- Niia, Y., Handron, C., & Markus, H. R. (2022). Will this help be helpful? Giving aid to strangers in the United States and Japan. *Frontiers in Psychology*, 12. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2021.784858>
- 岡 檀 (2013). 生き心地の良い町——この自殺率の低さには理由がある—— 講談社
- Parady, G., Takami, K., & Harata, N. (2021). Egocentric social networks and social interactions in the Greater Tokyo Area. *Transportation*, 48(2), 831-856. <https://doi.org/10.1007/s11116-020-10079-y>

- Robins, D. M., Sanders, C. R., & Cahill, S. E. (1991). Dogs and their people : Pet-facilitated interaction in a public setting. *Journal of Contemporary Ethnography*, 20(1), 3–25. <https://doi.org/10.1177/089124191020001001>
- Sandstrom, G. M., & Boothby, E. J. (2021). Why do people avoid talking to strangers? A mini meta-analysis of predicted fears and actual experiences talking to a stranger. *Self and Identity*, 20(1), 47–71. <https://doi.org/10.1080/15298868.2020.1816568>
- Sandstrom, G. M., Boothby, E. J., & Cooney, G. (2022). Talking to strangers : A week-long intervention reduces psychological barriers to social connection. *Journal of Experimental Social Psychology*, 102. <https://doi.org/10.1016/j.jesp.2022.104356>.
- Sandstrom, G. M., & Dunn, E. W. (2014). Is efficiency overrated? : Minimal social interactions lead to belonging and positive affect. *Social Psychological and Personality Science*, 5 (4), 437–442. <https://doi.org/10.1177/1948550613502990>
- Santini, Z. I., Koyanagi, A., Tyrovolas, S., Mason, C., & Haro, J. M. (2015). The association between social relationships and depression : A systematic review. *Journal of Affective Disorders*, 175, 53–65. <https://doi.org/https://doi.org/10.1016/j.jad.2014.12.049>
- 田中 世紀 (2021). やさしくない国ニッポンの政治経済学——日本人は困っている人を助けないのか—— 講談社
- Van Lange, P. A. M., & Columbus, S. (2021). Vitamin S: Why is social contact, even with strangers, so important to well-being? *Current Directions in Psychological Science*, 30(3), 267–273. <https://doi.org/10.1177/09637214211002538>
- Wood, L., Martin, K., Christian, H., Houghton, S., Kawachi, I., Vallesi, S., & McCune, S. (2017). Social capital and pet ownership : A tale of four cities. *SSM Popul Health*, 3, 442–447. <https://doi.org/10.1016/j.ssmph.2017.05.002>
- Wood, L., Martin, K., Christian, H., Nathan, A., Lauritsen, C., Houghton, S., Kawachi, I., & McCune, S. (2015). The pet factor : Companion animals as a conduit for getting to know people, friendship formation and social support. *Plos One*, 10(4), e0122085. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0122085>
- 山岸 俊男 (1998). 信頼の構造——こころと社会の進化ゲーム—— 東京大学出版会
- 山本 翔子・結城 雅樹 (2019). トロコ問題への反応の文化差はどこから来るのか?——関係流動性と評判期待の役割に関する国際比較研究—— 社会心理学研究, 35(2), 61–71. <https://doi.org/10.14966/jssp.1733>
- 全国盲導犬施設連合会 (2025). 「盲導犬受け入れ全国調査」を実施——48%のユーザーが拒否を経験—— <https://files.microcms-assets.io/assets/6b440ad22cc949f889b7e133bd8cb4be/92dccb12a63144d588c86c7fe5819e3b/zenkokuchosa2025.pdf> (2026年1月5日アクセス)
- Zheng, S., Tanaka, R., & Ishii, K. (2024). Empathic concern promotes social support-seeking : A cross-cultural study. *Emotion*, 25(3), 644–656. <https://doi.org/10.1037/emo0001451>

【脚注】

- 1 原語ではgenuine conversation。他に真摯な会話、本音の会話などの訳があり得るが、客と店員の会話として妥当な訳として率直を選択した。
- 2 かつては親密性が高く頻度の多い相互作用が起きていたが、現在は相互作用が起きていない関係性を指す。中高年にとっての、学生時代は友人だったが現在は交流がない関係など。
- 3 Granovetterの古典的な定義で考えても、コーヒー店に通う頻度が多ければ弱い紐帯とはいいい切れない。
- 4 心理学領域で親密ではない社会関係の機能に注目が集まったのは2020年代に入ってからであり、研究領域として新しい分、概念の整理やモデル化は急速に進行している段階である。Fingermanらの議論が、どれだけの期間「持ちこたえる」ことができるのかは筆者にもまったく予測がつかない。ここでFingermanらの類型を紹介するのは、筆者が（個人的には不満をもちつつ）この類型が一定の影響をもつと判断しているからであるが、あるいは、まったく影響力をもたずに忘れられるかもしれない。
- 5 翻訳は筆者による。日本語に訳すのが困難な内容が多いため、そのような場合には語を補ったり追記したりしている。
- 6 表1で示した連続体にはのらない、しかし重要な弱い紐帯の類型としてケビン・ベーコン型紐帯（親密な誰かを介した他者との関係）とソーシャル・メディアでの紐帯もあげられている。本研究の目的は紐帯に基づかない相互作用の機能を議論することであるので、ここでは省いた。
- 7 Fingerman et al. (2025) の原文では、表でpassing strangers (Table 1), 見出しでstrangers, 文中でcomplete strangers (いずれもp.359) が使われており、用語が混乱している。相互作用の一回性を重んじるのであればpassing strangersが適切であるが、見出しで用いられていることと、ストレンジャーの語義からしてpassingを冠するのは冗長と判断して、strangersのみを訳出した。
- 8 したがって、フリンジシップを強いて熟語的に訳するなら「友人未満関係」だろうが、この語では社会的文脈の共有という重要な側面が失われる。そのため、本研究ではカタカナで表記した。
- 9 インフォーマルな場では、筆者は「場所トモ」という語を用いることもあるが、この語では後述する活動の共有が含まれない。
- 10 隣人が多く含まれることは、場よりも近接性で理解するほうが伝統的であるし、そのほうが適切であるかもしれない。
- 11 加えて、日本人は米国人と比べて他者に援助を求める傾向が低い (Zheng et al., 2024)。ふたつの傾向が相まって、日本社会では社会的な不確実性が高くなりやすく、援助が低調になるのだと考えられる。
- 12 ここでの関係が親密なものとなると、「迷惑をかけたくない」という心理から互いに相互作用が避けられる危険もある (岡, 2013)。社会的な不確実性は低くとも、あくまでもその関係はAPRのように離脱可能であり、相互義務の小さなものである必要がある。
- 13 この社会的な不確実性の低さが、職業的なかわりをもつ労働者側の立場の弱さから来ていることには留意する必要がある。厚生労働省での報告 (三菱総合研究所, 2021) では、たとえば訪

問介護では36.4%の事業所で顧客からのハラスメントが発生したとされている。飲食店や小売店でも、店員は客に不快感を与えることを避けなければならない分、弱い立場に立たされている。ジェンダー的な不均衡が存在することにも注意しなければならない。

- 14 ここで一般的な娯楽と記したのは、アイドルやキャラクターなどの個別性の強い娯楽では、場が少数で参加者の重複が大きく、そのなかで社会関係に問題が生じたときに離脱が難しいか、その娯楽活動自体が損なわれる危険が大きいと考えるからである。「サッカー」「ボードゲーム」のように一般性の高い活動であれば、場の移動がより自由である。ただし、場の移動に際しては、参加者には一定程度の社会スキルや、それぞれの場のルールに合わせる柔軟性が要求されることになるだろう。